

令和 6 年度国外研修報告書

「循環デザイン及びストリート・アートと市政、市民との関わり方の研究」

研 修 先：ロイヤル・カレッジ・オブ・アート

研 修 期 間：R7 年 1 月 15 日～3 月 29 日

研修協力者：ボブ・マッシューズ教授

(国外研修員)

所属 (学部・学科等)

芸術学部ビジュアルデザイン学科

イラストレーション専攻

職名 教授

氏名 真島 猛

1. 研究の目的と背景

この報告書は、イギリスの環境デザインにおけるストリート・アートに関して、ベースとなるイギリスの文化施設と観光という基礎調査とストリート・アートの現地調査から得られた研究成果をまとめたものである。本研究では、ストリート・アートとは何か定義し、ストリート・アートの公共における環境に及ぼす「場所性」に着目した。環境デザイン及びストリート・アートの持つ「場所性」が市政と市民にどのような関係があるのか考察する。

公共の場所に描かれた絵は、一般的にストリート・アートもしくはグラフィティと呼ばれる。グラフィティを直訳すると落書きであり、公共物への落書きは違法行為となり器物損壊罪となる。一方で、グラフィティ・アーティストとして著名なバンクシー（美術手帖2021）ⁱの作品がアート・シーンにおいて高額で取引されるなど、この相反する現象を巻き起こすグラフィティとは何か？ストリート・アートとグラフィティの違いは何か？

今回の主なイギリス現地調査の対象として、バンクシーのロンドン及びブリストルの作品群、北アイルランドのベルファストの「平和の壁」、合法グラフィティ・トンネル「リーク・ストリート」、世界中のアーティストがロンドン各地で壁画を制作した「ロンドン・ミューラル・フェスティバル」、コロナ渦に亡くなった人々の「追悼の壁」を通したストリート・アート及びグラフィティの「場所性」を見ていく。

2. イギリスの文化施設

2.1. 文化施設の無料化と観光

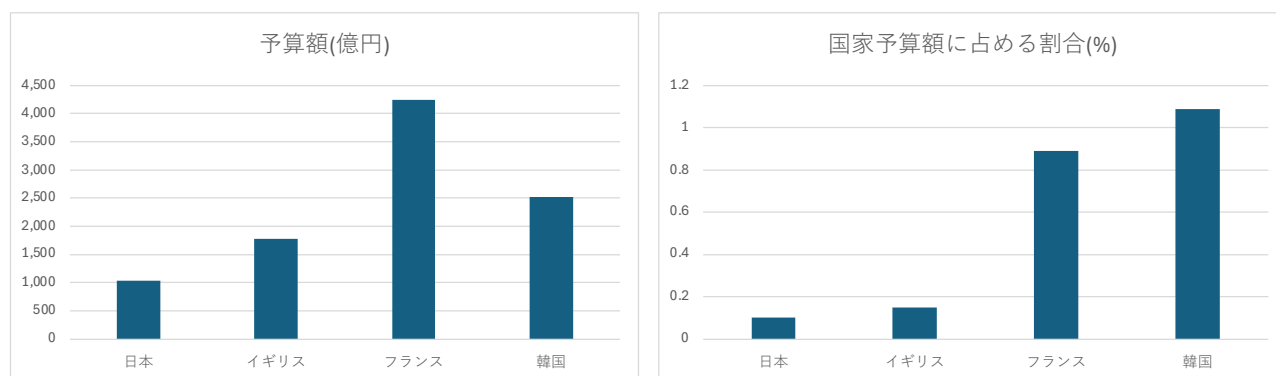
イギリスには大英博物館をはじめとする博物館や美術館、ギャラリーなどの文化施設が多く存在し、各施設が所蔵している作品数も膨大だ。建造物は歴史があり荘厳で美しく、著名な作品群をいつでも無料で見られ、各施設には連日大勢の観光客が訪れている。「国立美術館・博物館の館長たちで構成される評議会（NMDC）によると、入場料撤廃の前後10年で比較すると、それまで入場料を取っていた美術館・博物館の年間入場者数は、710万人から1800万人と約2.5倍に増加した。2001年以前からすでに入場無料だったミュージアムでも、入場者数は22%の増加となっていた（FIGARO2018）ⁱⁱ。」このような政府の入館料を無料とする政策は入場者数を増加する結果となっている。また国の文化に対する取り組みは、観光産業全体へ反映していると推測される。参考までに2023年度の国際観光客数をイギリスと日本を比較してみるとイギリスは7位、日本は12位で、イギリスは日本の約1.2倍、国際観光収入ではイギリスは3位、日本は10位で、イギリスは日本の約2倍となっている（やまところ.jp2023）ⁱⁱⁱ。文化施設の無料化と観光客数及び観光収入との関係性は未調査であるが、政府の観光財源とする文化施設の有効活用は大きいと思われる。

2.2. 諸外国の文化予算に関する調査

図1^{iv}は、文化庁による諸外国の文化予算に関する調査した内容である。予算額を見ると、4ヶ国の中でフランスが4,238億円で一番多く、次に韓国、イギリス、日本の順である。国家予算額に占める割合を見ると、4ヶ国の中で韓国が1.09%で一番多く、次にフランス、イギリス、日本の順である。これらのデータからフランスと韓国は、文化に対して多くの予

算を使っていることがわかる。

図1 諸外国の文化予算

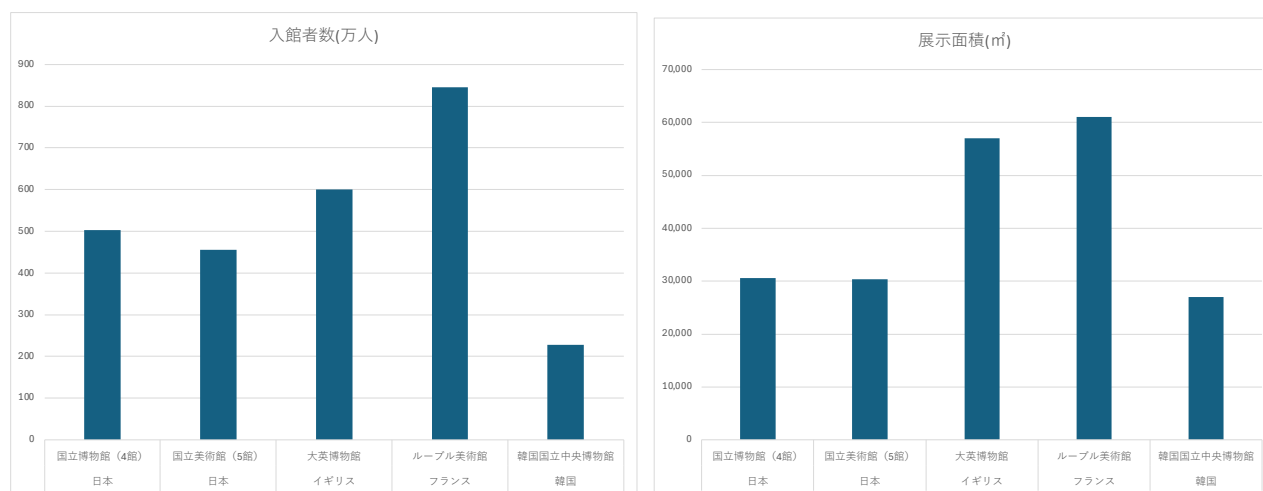


出典：諸外国の文化予算に関する調査_文化庁を元に筆者が作成

2. 3. 諸外国の国立文化施設の概要

図2^{vi}は、文化庁による諸外国の国立文化施設に関する調査した内容である。日本は国立博物館（4館）、国立美術館（5館）、イギリスは大英博物館、フランスはルーブル美術館、韓国は韓国国立中央博物館を対象としている。入館者数では、ルーブル美術館600万人が一番多く、次に大英博物館456万人と多く、日本の国立博物館（4館）と国立美術館（5館）は、いずれも少ないことがわかる。展示面積では、ルーブル美術館61,000㎡が一番広く、次に大英博物館57,000㎡と広く、日本の国立博物館（4館）と国立美術館（5館）は、いずれも小さいことがわかる。

図2 諸外国の国立文化施設

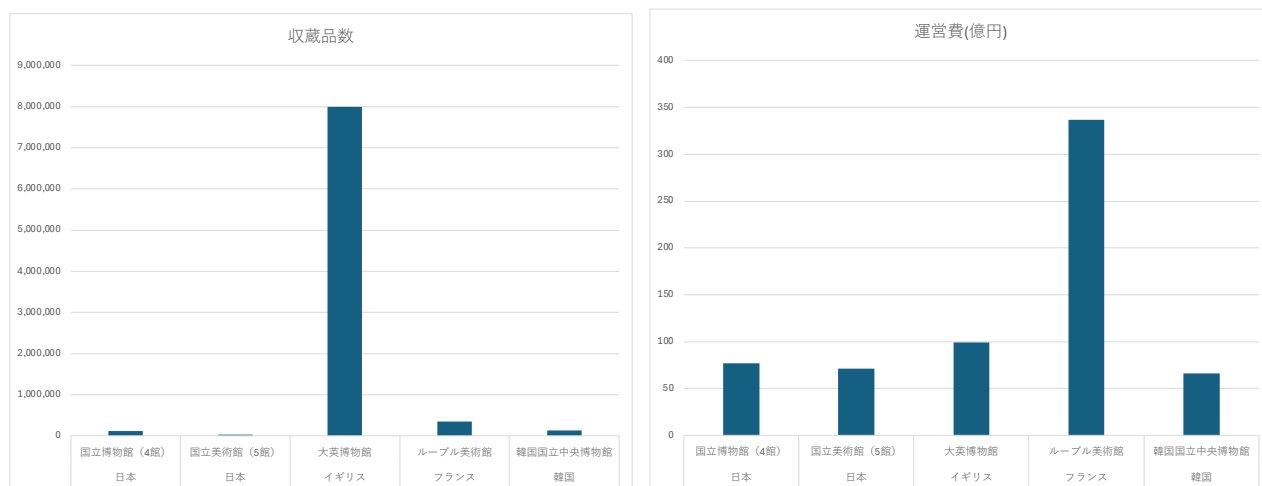


出典：諸外国の国立文化施設の概要_文化庁を元に筆者が作成

図3^{vi}は、収蔵品数では、大英博物館800万点と圧倒的に多く、次にルーブル美術館35万点と多い。日本の国立博物館（4館）と国立美術館（5館）は、いずれも少ないことがわか

る。運営費では、ルーブル美術館337億円と多く、次に大英博物館99億円と多い。日本の国立博物館（4館）と国立美術館（5館）は、いずれも小さいことがわかる。

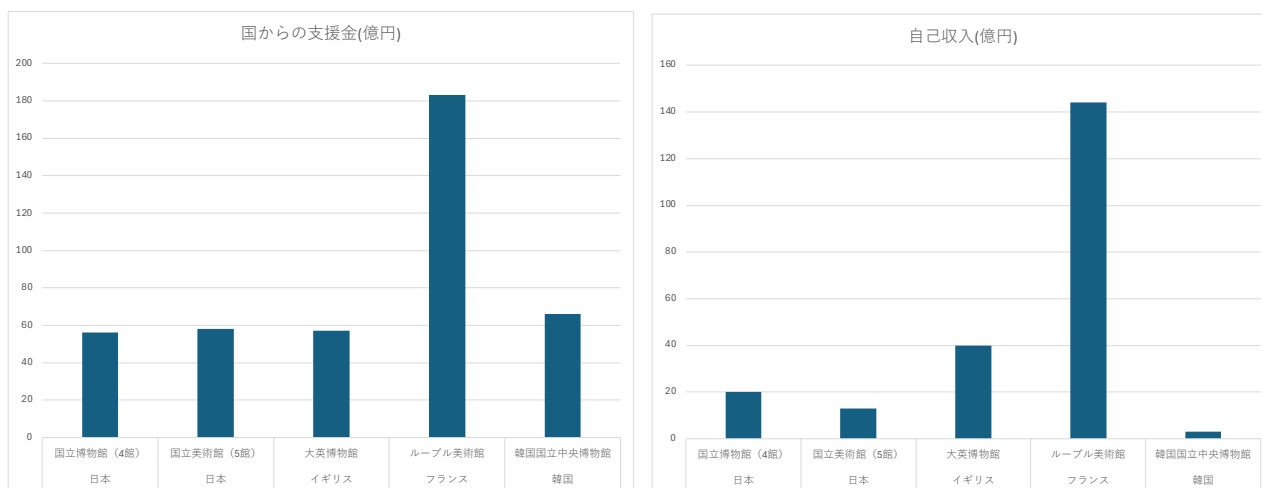
図3 諸外国の国立文化施設



出典：諸外国の国立文化施設の概要_文化庁を元に筆者が作成

図4^{vii}は、国からの支援金では、ルーブル美術館183億円と多く、次に韓国国立中央博物館66億円と多い。自己収入では、ルーブル美術館144億円と多く、次に大英博物館40億円と多い。日本の国立博物館（4館）と国立美術館（5館）は、いずれも小さいことがわかる。

図4 諸外国の国立文化施設



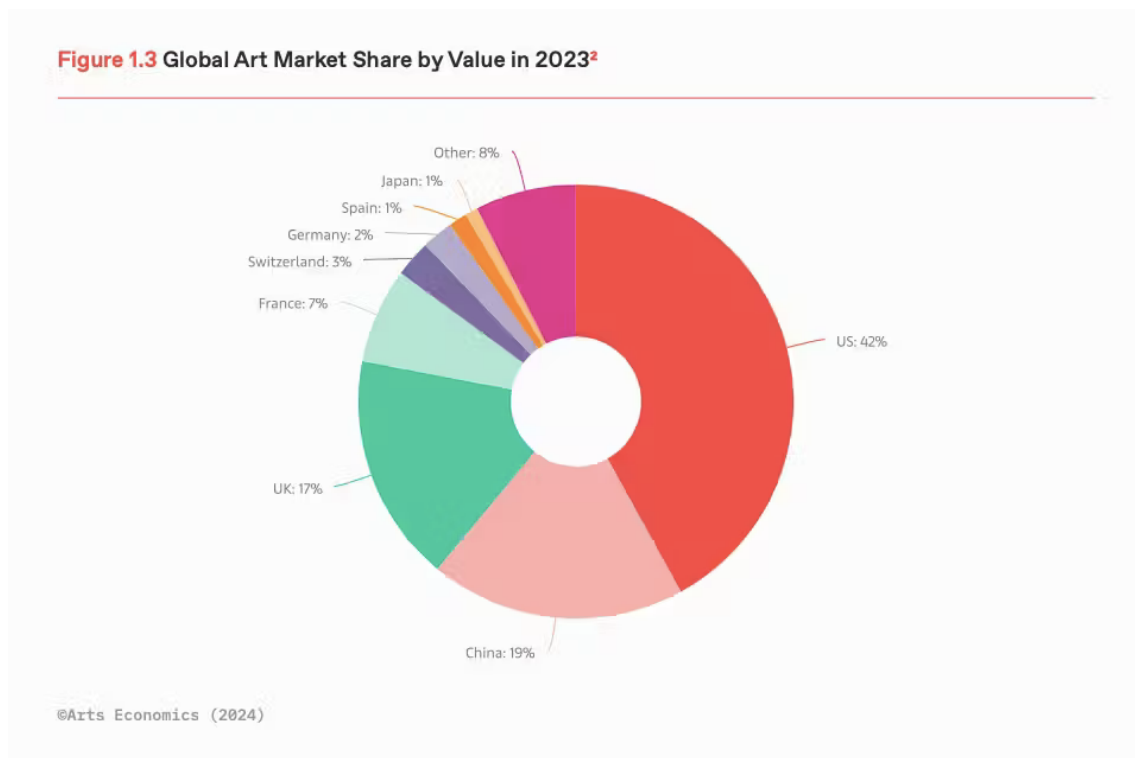
出典：諸外国の国立文化施設の概要_文化庁を元に筆者が作成

2. 4. イギリスの文化に関する背景

前項のように、イギリスは美術館・博物館の入館料無料化による来場者数の増加への国による施策や文化予算額、文化施設の規模など日本と比べ異なる背景であることがわかる。先

に揚げた大英博物館をはじめとするナショナルギャラリー、ビクトリア&アルバート美術館、テートモダンなどの著名な美術館・博物館、ハウザー&ワースなどの世界的に影響を持つギャラリーがロンドンだけでも数多くある。アート・バーゼルとUBSによる2023年の世界美術品市場を分析するレポート「The Art Basel and UBS Global Art Market Report 2024」ではイギリスは17%で世界第3位、日本はわずか1%となっている（図5）^{viii}。以上のデータからイギリスの文化に関する背景として、本研究の環境デザイン及びストリート・アートがどのような存在として位置しているかを読み解いていく。

図5 世界美術品市場



3. 環境デザイン及びストリート・アート

3.1. 環境デザイン

環境デザインとは、人々が生活に関係する都市計画や建築、プロダクトなどのデザインであり、そこに住む人、訪れる人、市政など関わる人々にとって有益であることを目的としている。前項で述べた美術館等の文化施設や公共の場に存在するストリート・アート等の関係性の考慮も環境デザインに含まれると考える。今回の調査ではそうした多様な要素、関係性の中で、イギリスの都市における環境デザインとしてのストリート・アートが市政や市民にどのような影響を与えているか調査する。

3.2. ストリート・アートとグラフィティ

一般的にストリート・アートとグラフィティは混同して使われるが、先行研究では「グラフィティは決して許されない。常に危険を伴う。しかし、ストリートアートには、有用性や

価値が常に存在し、同じ考えを持つ市民のコミュニティに受け入れられる可能性が常に存在する。～中略～ストリートアートは保存され、グラフィティは消去されます。ストリートアートは保護され、グラフィティは編集されます(Christopher2019) ^{ix}。」「グラフィティを「公共の場所の表面に無許可で書かれたものや絵」と定義(Forster2012) ^x。」と述べられておりストリート・アートとグラフィティの意味、存在意義、存在価値、更に違法か合法のガイドラインを設け定義を明確化している。またグラフィティは、ヒップホップ(ラップ、DJ、グラフィティ、ブレイクダンス)の4大要素(L. I. T. 2020) ^{xi}の一つとして、1960年代にニューヨークから始まったストリート・カルチャーであるとされ、ストリート・アートとグラフィティはストリート(公共の場)での行為であり「場所性」という特徴を生かした表現方法が共通項であるが、両者の違いはアートとして第三者に認められる存在価値があるかどうか重要なポイントとなっている。

4. イギリス現地調査

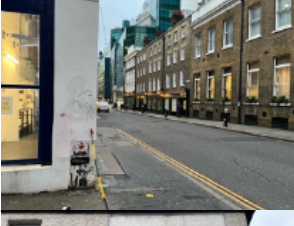
4.1. ロンドンのバンクシー

今回の現地調査のきっかけとなったバンクシーの作品を巡っていく。ロンドン各地に存在するバンクシーの作品の中から8作品(図6)を、エリア(ロンドン中心部、ロンドン郊外)、エリア別の種別(オフィス、観光、商業、住宅)、場所の特徴(設置場所の管理者、人通り、交通量等)で比較した(表1)。

図6 ロンドンのバンクシー作品



表1 ロンドンのバンクシー作品の比較

番号	エリア	種別	場所の特徴	画像
①	中心部	観光、商業	・鉄道高架下の店舗 ・飲食店のテラス（閉店時は門があり中に入れない） ・グラフィティのメッカ、繁華街 ・作品の側にはゴミ箱置場 ・昼間で人通りは少ない ・近隣に駅、大通りあり ・裏通のため交通量は少ない ・車道に車を停めるスペースあり	
②	中心部	・観光 ・商業	・グラフィティのメッカ ・繁華街 ・路地から入った広場 ・車を停めるスペースあり ・イベント会場、屋台が複数並ぶ ・ゴミ箱置場 ・仮設トイレ前	
③	中心部	・オフィス	・個人事務所 ・人通り多い ・向かい側の道は車の交通量が多い ・事務所の駐車場スペースあり ・作品の前にはタバコやゴミが散乱している	
④	郊外	・住宅	・店舗はフィッシュ&チップス店 ・周りは落書きがほとんどなく閑静な住宅街 ・車の交通量は少ない ・近くに小学校があり通学路	
⑤	郊外	・住宅 ・ハイエリア	・個人住宅 ・人通りは少なめ ・側に車道は車通り多い ・近隣に落書きは見られない	
⑥	郊外	・ローカル ・住宅 ・商業	・個人事務所 ・近くの商店街はエスニック店が多い ・側の道路は比較的車の交通量が多い ・人通りはまばら ・樹木の敷地はアパート	
⑦	中心部	・オフィス ・商業 ・住宅	・飲食店の壁面 ・昼間の人通りはまばら ・側の道路は車の交通量が多い ・近隣に商店街あり ※作品とアクリル板の劣化、落書きあり	
⑧	郊外	・ローカル ・住宅	・リッチモンド公園近く ・オフィス、住宅 ・建物全体を改修中 ※作品は撤去されていた	

今回、ロンドンのバンクシーの作品を現地調査した数は18作品で、その内現存するものは16作品、撤去もしくは消去されたものが2作品である。現存する16作品の内4作品以外は全てアクリル板で覆われ保存されている。保存されているとは言え、年月が経ったものはアクリル板の劣化が見られ、アクリル板の上から他人が落書きした作品は元の絵自体が確認できないものもあった。これもグラフィティが公共の場でしかも野ざらし状態にあることも特徴の一つと言える。

4.2. ブリストルのバンクシー

ブリストルはイギリス西部の港湾都市で、ロンドン・パディントン駅から高速鉄道GWRで約2時間の距離にある。ブリストル中心部には複数の大学があり若者が多く活気があり、アートや音楽の盛んな街で、中心街に美しい教会や美術館、店舗、オフィスなどが詰まったコンパクトシティだ。そしてバンクシーはこの街で生まれ、彼の初期の作品が多く現存し(図7)、バンクシーの作品を紐解く上で重要な拠点である。

ブリストルの各地に存在するバンクシーの作品の中から8作品(図7)を、ロンドンと同様にエリア(ロンドン中心部、ロンドン郊外)、エリア別の種別(オフィス、観光、商業、住宅)、場所の特徴(設置場所の管理者、人通り、交通量等)で比較した(表2)。

図7 ブリストルのバンクシー作品

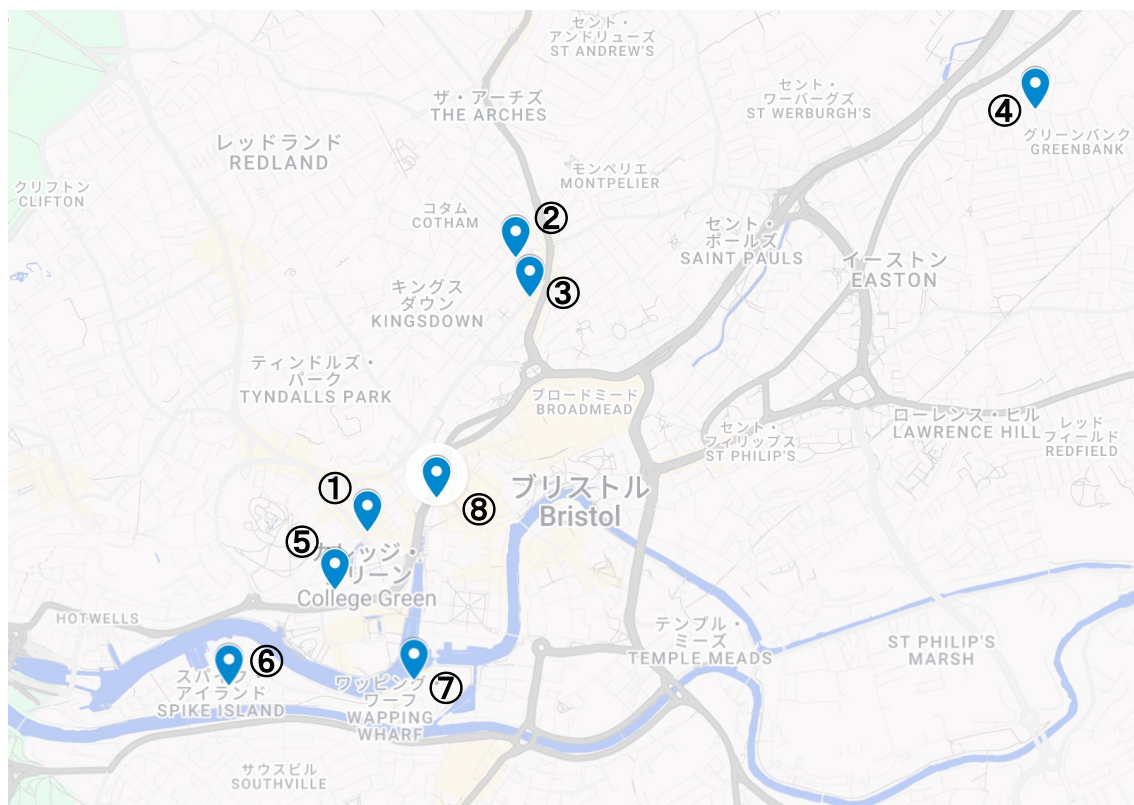


表2 ブリストルのバンクシー作品の比較

番号	エリア	種別	場所の特徴	画像
①	中心部	・商業 ・観光	・ヒルストリート ・ショップが立ち並び人通り多い ・作品の下部はゴミ箱置場	
②	中心部	・住宅	・住宅街 ・アパート ・坂道の途中にある住宅の外壁	
③	中心北部	・商業	・車が多いストリート ・飲食店など多く並ぶ活気のある通り	
④	北東部	・ローカル ・住宅街	・車が多い通りから入った通り ・近くにハイウェイが通っている ・有色人種、移民が多い	
⑤	中心部	・公共施設 ・オフィス	・図書館 ・ビルとビルの谷間 ・業者がトラックから荷物を積み下す場所	
⑥	中心南部	・ベイエリア ・観光 ・住宅	・造船所が立ち並ぶ一角 ・住宅 ・柵があるため近寄れない ・周りに落書き	
⑦	中心部	・美術館 ・港湾部 ・観光	・M Shed美術館 ※元々は船舶にステンシルされていた	
⑧	中心部	・美術館 ・港湾部 ・観光	・M Shed美術館 ※台座をデザインしたTシャツ ※破壊された銅像と一緒に展示されている ※台座のみ元の場所にある	

バンクシーの活動拠点であるロンドンと故郷であるブリストルには多くの移民が暮らし共存してきた歴史がある。「英国の人口の14%が外国生まれで、ロンドンに至っては人口の35%を占めているという（日本の総人口に占める外国人の割合は2020年1月現在2.3%）（JLGC 2021）^{xii}。」バンクシーの初期作品④が残る場所周辺を観察すると彼の根源に他民族との関わりから得た影響力は大きいことが推測され、彼はそうした環境の中で育ちグラフィティを一つの表現手段として経験を積み重ねてきた。⑧の作品は、奴隷が最初にヨーロッパの地に連れて来られた場所がブリストルであった歴史やBLACK LIVES MATTER^{xiii}に呼応したブリストル市民のデモ活動などからも彼自身のアイデンティティとして活動の原動力になってきた現れの一部と言える。

バンクシーの作品を「場所性」において分析すると、グラフィティたちは線路沿いや駅周辺などの一目に付かず描きやすい箇所やエリアに集中していることに対して、バンクシーの作品は前述の通り広範囲に渡り他グラフィティたちと場所を共存していない特徴がある。近年では更に活動範囲を拡張し、ウクライナの戦場やガザ地区の分断壁など「場所性」に特化した活動を続けている。バンクシーがなぜ匿名性に拘りメッセージ性の高い作品を世に発信しているのか、またグラフィティという違法行為上でのフォーマットを用いている点も「場所性」に密接した表現であることが理由であると推測される。オークションへ作品を出品し落札時に作品を細断した有名なエピソード「アートは、一部の富裕層が所有したり、金融商品のように売買したりするものではない（美術手帖 2018）^{xiv}。」などのバンクシー自身のコメントにあるように、資本主義におけるアートの存在意義を問うている。公共の場に存在することがグラフィティの特性である「場所性」からの解説したアートの存在価値を見ることができる。

4.3. 合法グラフィティエリア

ロンドンには誰でも許可なく落書きできる合法の場所があり、その中でも有名なグラフィティ・トンネル「リーク・ストリート」は観光名所となっている。本来であれば違法行為とされるグラフィティだが、政府はこの場所のグラフィティを地域活性化のため観光資源として有効活用している。このような矛盾する現象もグラフィティ特有と言える。視察した際に課外授業と思われる沢山の学生たちが訪れ、学生たち自ら落書きを楽しんでいた（写真1右）。

写真1 Leake Street



4.4. ベルファスト「平和の壁」

北アイルランドの首府ベルファスト市西地区には「平和の壁画」と呼ばれる場所がある（写真2左）。これは1969年に北アイルランドで起こった暴動直後に造られユニオニスト（プロテスタント系）とナショナリスト（カトリック系）を分ける分離壁だ。壁の高さは8mほどで長さは数Kmにおよび、その光景は異様である。筆者はこの壁を歩いて廻ったが、ユニオニストが多く住む居住区側の分離壁には多くの壁画が描かれているが、ナショナリスト側の分離壁には全く描かれていない。

写真2 ベルファストの壁画



「平和の壁画」から別の場所に移動し、ユニオニスト側の居住区を歩いて廻ると多くの住宅の壁に壁画が描かれている。描かれている内容は一変し、ユニオニストを象徴するイギリス国旗やアルスターのマークも至る所に掲げられ、この居住区の主張を物語っている。更に居住区の奥に進むと攻撃性の強いメッセージ性の高い壁画が現れる（写真2中）。「ベルファストの西地区は北アイルランド問題の矛盾が最も集約した場所であるため、閉塞感の強い地域であり、原理主義主張が一定程度支持される社会的土壌がある。こういった状況にある地域で描かれた壁画に、攻撃的な表現が用いられた壁画が多いという事実は驚くにはあたらない（福井 2007）^{xv}。」

ナショナリスト側の居住区にも壁画は存在するが描かれている内容は異なる。ナショナリスト側に描かれたボビー・サンズ（写真2右）は、アイルランド政党シン・フェイン党の元党首で、イギリス政府に対してハンガーストライキを行い獄中で亡くなっている（享年 27 歳）。

4.5. コープランドの壁画

北アイルランドの壁画と同様にロンドンにも多くの壁画が存在する。グラフィティと異なる点は、明らかに落書きではなく壁の所有者から許可をもらい時間を掛けたと思われる作品が多い。壁画の目的としては、企業や店舗などの広告メディアとして、また街のシンボルや活性化などが考えられる。コープランドの壁画（写真3）は2020年にLONDON MURAL FESTIVAL AT COPELAND PARKが開催された際に描かれた作品だ。「ロンドン・ミューラル・フェスティバル（LMF）では、100人以上の世界的なアーティストがロンドンに集まり、首都の40か所以上の大規模な壁に絵を描きました（LMF2020）^{xvi}。」グラフィティが落書き及び損壊行為であ

ることに対して、壁画は積極的に活用されている点で、同じ公共の場所に描く行為であっても全く意味が異なってくる。そういう意味で壁画はストリート・アートに分類される。

写真3 コープランドパークの壁画



4.6. 「追悼の壁」

ロンドンのウェストミンスター宮殿とテムズ川を挟んだ対岸にある聖トーマス病院の外壁に「ナショナル・コービッド・メモリアル・ウォール」がある。この壁画は新型コロナが原因とみられる死者の「追悼の壁」（写真4）として市民団体の呼び掛けで始まった。パンデミックから5年以上が経った今も多くの人々がここに訪れ、この壁画を保護し続けるグループがいる。「10人のボランティアが、何千もの手描きの赤いハートと献辞を管理している。死亡証明書に新型コロナと記載されている人1人につき1つずつで、国立新型コロナ追悼壁となっている。～中略～この壁は2021年3月29日に許可なく設置され、現在では約25万個のハートがあり、毎週さらに追加されている。」この活動を始めたミシェル・ランボールさんは母親を新型コロナで亡くし、人々のこの場所に記念碑を作る呼びかけに応えた。「私が来たとき、壁には何も描かれていませんでした。私たちは許可を得ていなかったので、事実上、壁に落書きをしていたため、逮捕される可能性がある」と事前に警告されていました。」

(BBC2025) ^{xvii} この場所での落書きは違法行為であるが、一般市民の行動の結果、合法とされることになる。この壁画は聖トーマス病院の外壁で、前述のバンクシーの医療従事者へ向けた作品を送った病院である。

写真4 「追悼の壁」



5. 考察

グラフィティは、ストリートという場所から生まれたヒップホップカルチャーでありストリートで描かれるビジュアル表現行為であることは前述で述べた。場所や描き手が変われば別の異なるグラフィティが生まれるように、グラフィティは他者から消去され、上書きされ他の異質な存在へ変化する運命にある。これは合法であり保護されるストリート・アートにはないグラフィティ独自の変化である。バンクシーの作品で「2004 年に作成された当初は「London Doesn't Work/ロンドン機能しない」と書かれたプラカードを持ったネズミがステンシルで描かれていました（写真 6 左）。後に「I love London, Robbo./ロンドンが大好きです、ロボ」と上書きされることになった背景には、ロンドンの伝説的なグラフィティライター「ロボ」とバンクシーとの長年にわたる確執が生んだ「グラフィティ戦争」が関係しています（写真 6 右）（BANDAL2024）^{xviii}。」このようなエピソードこそまさにグラフィティの変容であり特徴である。

また違法であったグラフィティが、第三者から許容され認められるとストリート・アートとなり別の価値としての存在として変化する。前述したロンドンの「リーク・ストリート」では観光や教育資材として、ベルファストの「平和の壁」では紛争の歴史の継承や政治、宗教を伝達するものとして、「コープランドパークの壁画」では世界のアーティストたちと地域の繋がるものとして、「追悼の壁」では亡くなった人々を偲ぶ場所として、同じ公共の場所に描く行為が「場所性」によって変容している。イギリス東部のテンドリング市の市政担当者は、「バンクシーは「彼独自の許可」のようなものが存在すると言えるし、そもそもこの場所の価値を高めるような行為なので今回の件に関しては、違法性はないと判断した。このエリアは観光スポットでもあり、バンクシーのオリジナルの作品があれば、それも一つの観光資源として多くの利益をもたらしてくれると考えたからだ（VICE2014）^{xix}。」これは市政が違法行為であるグラフィティを容認し、環境デザインの一部としてストリート・アートを取り組んでいることを証明している。このように同じ公共の場所、同じ行為であるグラフィティが時間の経過と共に第三者の別の価値観としてストリート・アートとして変容するものである。そして、環境デザインにおけるストリート・アート及びグラフィティとは、「場所性」を必要不可欠な要素とし、他アートとは異なる固有の表現であると言えるであろう。

写真 6 London Doesn't Work



【参考文献】

- i 美術手帖2021「バンクシーの「シュレッダー作品」が28億円で落札。バンクシー作品として過去最高額」『<https://bijutsutecho.com/magazine/news/market/24701>』
- ii FIGARO2018「アートが身近にあるイギリス、その理由とは？」『<https://madamefigaro.jp/culture/180713-tatestives.html>』
- iii やまところ.jp2023「2023年の国際観光、訪問者数トップ フランスで1億人、観光収入27兆円のアメリカ。観光支出は中国—UN Tourism」『https://yamatogokoro.jp/inbound_data/53754』
- iv 諸外国の文化予算に関する調査_文化庁.pdf
- v 諸外国の国立文化施設の概要_文化庁.pdf
- vi 諸外国の国立文化施設の概要_文化庁.pdf
- vii 諸外国の国立文化施設の概要_文化庁.pdf
- viii The Art Basel and UBS Global Art Market Report 2024「2023年、世界美術品市場の規模は約9兆6100億円。主要市場やセクターは減少傾向」『<https://bijutsutecho.com/magazine/news/market/28627>』
- ix Tilley Christopher2019「10 From Pollution to Purity: The Transformation of Graffiti and Street Art in London (2005-17)」『London's Urban Landscape: Another Way of Telling. University College London, 2019.』
- x Alan M. Forster2012「Evaluating the cultural significance of historic graffiti」『Evaluating historic graffiti』
- xi L. I. T. 2020「Hip Hopの4大要素プラス5」
- xii Japan Local Government Centre 2021「英国移民の歴史」『https://www.jlgc.org.uk/jp/ad_report/英国の移民の歴史』
- xiii BLACK LIVES MATTER『<https://blacklivesmatter.com/>』
- xiv 美術手帖 2018「バンクシーは、なぜ作品を切り刻まなければならなかったのか？」『美術手帖 <https://bijutsutecho.com/magazine/insight/18818>』
- xv 福井令恵 2007「壁画と場所：北アイルランドの二つのコミュニティの壁画にみる内容と場所性」『比較社会文化研究. 21, pp. 73-82, 2007-03-10. 九州大学大学院比較社会文化研究科』
- xvi LMF2020「LONDON MURAL FESTIVAL AT COPELAND PARK 2020」『<https://www.copelandpark.com/blog/2020/10/29/london-mural-festival-at-copeland-park/>』
- xvii BBC2025「A Wall of Hearts: The guardians of the Covid memorial」『<https://www.bbc.co.uk/news/articles/cn4y8z9m20do>』
- xviii BANDAL2024「【ロンドン】バンクシー地図で巡る！イギリスに現存する有名なネズミの作品などの場所」『<https://bandal.jp/banksy-london-map/>』
- xix VICE Japan 2014「なぜバンクシーだけが壁に描くことを許されるのか」『<https://www.vice.com/ja/article/banksy/>』